

生涯学習課 NEWSLETTER



福島県文化スポーツ局 生涯学習課

TEL 024-521-7404 FAX 024-521-5677

E-mail shougaigakushuu@pref.fukushima.lg.jp

No.11 R3.9.21

ニューズレターの概要

このニューズレターは、平成27年度に開催された「全国生涯学習ネットワークフォーラム」の後継事業として、震災からの復旧・復興や地域課題に取り組んでいる県内の関係者等の情報を共有し「学びをひろげ、つなげる、いかす」ため、年に2回発行しています。

皆様方からも、多種多様な情報をぜひ当課までお寄せください。日常的な取り組みや様々な企画のもと実施されたイベント等、生涯学習に関する情報ならどんなものでも結構です。

今後も、互いに情報を共有し合い、継続的な取り組みが推進されるよう積極的につながっていきましょう。

スポーツで健康づくり 仲間づくり・街づくり

NPO法人「エフ・スポーツ」

福島市中心市街地の健康づくりと地域づくりをサポートするため平成13年にNPO法人エフ・スポーツが設立された。



今回、エフ・スポーツのクラブマネジャー相澤勝博氏（写真左）、ここにこ体カアップ指導者渡辺さつき氏（写真右）に、エフ・スポーツ設立の経緯や活動の様子、今後の展望などについて話を伺った。

みんなが自由にスポーツを 選んで活動できる場所を！

現在、小学校高学年から80代の方まで幅広い年齢層の会員200名で構成されている。震災やコロナ禍の影響があり、現在の会員数はピーク時の600名から減少している。設立当時は、子どもがスポーツを楽しめる場が限られており、活動できるスポーツの種類も少なかった。「地域の住民が、いろいろなプログラムを自由に楽しめるような、誰でも参加できる仕組みの団体を立ち上げよう。」そんな思いから、エフ・スポー

ツは産声をあげた。

震災を乗り越え、団体の運営に立ち上げから関わってきたクラブマネジャーの相澤氏は、「最近では希薄になってきた人と人とのつながりを感じる。子どもたちが声をかけてくれたり、通っていた子どもが大人になって指導者になったりしている。また、会員に子どもができて、その子どもと一緒に通ってくれている。これからは、誰でも、どんなスポーツでも楽しめるよう地域住民を巻き込んだ活動を続けていきたい。」と語ってくれた。

「ここにこ体カアップ」で 元気づくり

エフ・スポーツのプログラムの一つである「ここにこ体カアップ」指導者の渡辺さつき氏に話を聞いた。



渡利学習センターで行われた「ここにこ体カアップ」の様子

子どもから高齢者まで、体に負担をかけないよう、誰でも無理なくでき

るような心がけている。ストレスが多い社会なので、病もそこに原因があることが多く、ストレスマネージメントの観点からも、心が元気になるように行っているということである。大切なのは、心のもちようで、ヨガや体操で心を整えるようにしているそうだ。



「ここにこ体カアップ」受講生

高齢者の方には、特に言葉に気を付けるようにしている。人生の先輩であり、言葉はちょっとした傷付くので傷付けてしまうことがあるからと話す。参加者からは、「とても楽しい」「体を動かすことで、元気でいられる。」という声が聞かれた。コロナ禍前に比べると、親睦を深める機会が減ったが、体操教室が、人と人がつながる大切な機会になっている。

みんなでリレーマラソン 42・195キロ

自由にスポーツを選択し、楽しむためにとの思いで始まったエフ・スポーツの活動は、今年で20年目を迎えた。年間のイベントの一つに、信夫ヶ丘陸上競技場で行うリレーマラソンがある。子どもから大人まで、みんなが自由に参加でき、楽しみながらつなげる「たすき」は、しっかりと次世代に引き継がれている。

子ども×アートによる子どもの元気、地域活性化に向けて NPO法人

「3・11子ども文庫にじ」

相馬市で週に3回、本の貸し出しを行っており、室内は裸足で歩ける板ばりの床に、無垢の木を組み合わせた本棚には三千五百冊の絵本がある。今回、平成23年に設立された「NPO法人3・11子ども文庫にじ」を訪ね副理事長の佐藤史生氏から話を伺った。



赤ちゃんからお年寄りまで

本とアートで楽しむために

版画家の蟹江杏氏が「東日本大震災で傷ついた子どもたちに絵本と画材を送ろう」と呼びかけ、世界中から寄贈された絵本・児童書を収めたのが「3・11子ども文庫にじ」だ。同時に届けられた画材で、子どもたちが描いた絵は約300点になり、全国で巡回展を行ってきた。理事長でアーティストの蟹江氏は、

絵本の中の主人公たちが、どんな困難も想像力で乗り越えられるように、現実の世界で窮地に立たされたとき、想像する力「アート」には人々の心を助ける力があると信じる。

「3・11子ども文庫にじ」では、毎年「絵本のつどい(ブックトーク)」やアート中心のワークショップを定期的に開催し、子どもたちの心を豊かにすること、参加者同士の交流を促進し、本を媒介にしてそれぞれの想いを共有するコミュニティの拠点として活動を行ってきた。

アート中心のワークショップは、年4回行われ、東京から一流のアーティストを招いて、子どもたちの自己実現、積極性、自主性、自立性を育んできた。10月には地元商店街の協力を得て、子どもたちに大人気の「ハロウィン・パーティー」が予定されている。



子どもたちが自由に本を楽しむ部屋

また、「こぼこ文庫」として、相馬市内の全小学校低学年に60箱の本を学級文庫として活用できるように設置している。毎年4月に中身の入替やメンテナンス等を行っている。



相馬の子どもたちによって彩られた「3.11子ども文庫にじ」の玄関

「3月11日の、あのね。」展

2011年、当時小学校3年生だった子どもたちが、避難所で描いた約200枚の絵。一枚一枚の絵が訴えかける力は人々の心を打ち、共感を呼んだ。3・11の辛く悲しい体験を踏まえながら、未来に向かってたくましく生きていこうとする子どもたちを見守り、励ます意味を込めて、10年後に返却する約束のもと全国へ巡回展示することとなった。

昨年度が最後の展覧会となり、2月に18歳になった子どもたちに当時の絵を返却したことは、駆け付けてくれた保護者とともに忘れられない時間になったと佐藤氏は語る。

地域「コミュニティ」の希望として

2020年度は、新型コロナウイルス感染症及び2021年2月13日に発生した福島県沖地震等、東日本大震災以降、相馬市にとっては、最も多難な時期であったと振り返る。そんな中、「3・11子ども文庫にじ」の存在は、地域コミュニティの希望の一つとして存在している。「地域子どもたちやその保護者が集う場」として、これまで培ってきた支援活動をさらに発展させ、今まで以上にこの活動を継続していかなければならないと、佐藤氏は強く語ってくれた。

被災した子どもたちのために世界中から絵本が送られてきたことをきっかけに始まった活動は、現在「子ども文庫にじ」(相馬市)、「子ども文庫みず」(天栄村)、「子ども文庫おひさま」(千葉県東金市)と県外にも広がり、これからも「アートによる復興支援」活動は続いていく。



にじだより第43号